



読書は旅に似ている

愛知電機株式会社 代表取締役社長 **小林 和郎**

私は採用面接にあたって、しばしば同じ質問をする。

「あなたは本を読んでいますか。最近印象に残った本は何ですか。」

近年、「本はあまり読みません。」と答える学生や、流行りのハウツー本や芸能人の書いたベストセラーの題名を印象に残ったと挙げる人が多い。それが悪いとは思わないが、もっと多様な本を読まないのだろうか、とも思う。中には「私は本を読みません。」と堂々と答える学生もいる。本を読まなくても大学生が務まる時代が来たのか、とあまりの衝撃で考え込んでしまった。

私は物心がついた頃から本に親しむ環境で育った。

母親は読書家だった。生家の薄暗い廊下に大きな書棚があり、棚の何段かに有名な文学書がぎっしりと並んでいた。今ではほとんど見かけないが、昭和30年代は、「世界文学全集全50巻」といった全集物を日本の大手出版社が刊行していた時代だった。母親は、当時小学校低学年だった私にパール・バックの「大地」やヘルマン・ヘッセの「車輪の下」などを勧めたが、難解なばかりだった。この全集の中に「バスカヴィル家の犬」と「水晶の栓」がなければ、私の読書体験はそこで終わっていたかもしれない。言うまでもなくコナン・ドイルのシャーロック・ホームズシリーズ、モーリス・ルブランのアルセーヌ・ルパンシリーズの代表的な長編である。全集の作品は抄訳であったが、子供の私を推理小説の沼に落とすには充分であり、忽ちヴァン・ダインやエラリー・クイーン、アガサ・クリスティ、ジョン・ディクソン・カーなど本格推理小説に嵌っていった。

沼の深さは際限なく、中学生になった頃には邦訳された入手可能な海外本格推理小説をほぼ読みつくしてしまった。当時は、ネット検索は元よりオンライン書店など全くない時代である。書籍の巻末に掲載されている「著者の作品一覧」を頼りに自宅近くの書店を巡り、名古屋など近隣の都市まで足を伸ばして本を漁った。挙句、出版社に依頼して在庫を郵送してもらい、お目当ての作品を手に入れたときの嬉しさは今でも瑞々しい記憶である。ハヤカワミステリで有名な早川書房や創元推理文庫を発行する東京創元社には随分お世話になった。

その早川書房が、世界的にもあまり例のない古今のSF小説の代表作を集めた「世界SF全集」全35巻の刊行を1968年10月から開始した。中学生だった私は、推理小説に続いて近代SFに直撃され、ハインライン、アシモフ、ブラッドベリ、クラーク、レムなどの作品の空想世界を飛び回った。その中には小松左京の「果てしなき流れの果てに」筒井康隆の「48億の妄想」光瀬龍の「たそがれに還る」など日本のSF作家の傑作も含まれている。めぼしいSF作家の代表作を

読み終わると、SFジャンルの作家ではない、いわゆる純文学系の作家が書いたSF要素のある小説が待っていた。三島由紀夫の「美しい星」、安部公房の「第四間氷期」、稲垣足穂の「一千一秒物語」などである。

やがて、ミステリやSFというジャンルに拘らない小説の楽しさを徐々に知っていき、改めて「大地」やトーマス・マンの「ブッテンブローグ家の人々」などの優れた大河小説の面白さを理解できるようになった。時間を忘れて読み耽り、異国に生きる人々の心情の世界を歩いたのは、大学生生活も半ばを過ぎた頃のことだ。

振り返れば、文学の本流にたどり着くまでに随分遠回りしたものだが、お陰でジャンルを問わず書物を楽しんでいる。社会人になってからは、通勤時間が比較的長かったこともあり、嘗ては2日に1冊は読破していた。小説では推理小説やSF、時代小説、怪奇小説、経済小説、ファンタジーなどを好んで読む。但し、ベストセラーにあまり興味が持てないのは、天邪鬼だからなのだろう。

しかし、時の流れには逆らえず、視力が落ちてからは読書量が激減した。それでも連休の前には新聞の書評欄で興味を引く書物を見つけると、ネットで購入してしまう。最近は電子書籍をスマートフォンで読むこともあるが、やはり質感のあるハードカバーの書籍を読む方がわくわくする。お気に入りの、或いは初めて読む分厚い本を手取る喜びは何物にも代えがたい。ただ、自宅にある未だ手を付けていない書物の山登りは、家族からの苦情が避けられないが。

私にとって、読書体験は旅に似ている。人は現実の旅において物理的な手段で空間を移動し、新しい場所や文化を体験する。しかし、時間的・物理的な制約があり、限界がある。一方、本の世界の旅において、人はページを開くだけで作者の創造した世界を自由に移動し、異なる時代や異世界の人々の生活や人生を疑似体験することができる。また、「未来のことは過去から学ぶ」と言われるように、歴史に名を刻んだ人々の思考の過程を学ぶことができる。

本の旅は屢々現実の旅よりも生々しい体験として読者の記憶に刻まれる。現代の少なからぬ人々が、この楽しみ、知的冒険と疎遠でいるのは本当に勿体ないことだと思う。だから、私は当社を希望する人たちに「本は読みますか？」と問いかけ、入社後は「ぜひ、起承転結のあるまとまった分量の本を読んでください。」とお願いする。読書は手間と時間がかかるが、ネット検索よりも豊かな時間と知識を私たちに与えてくれる、と考えるのは私が古い人間だからだろうか。

タイパという言葉やファスト動画が持つ嫌われる時代だが、本当に贅沢な時間の使い方を私たちは忘れていないだろうか。あなたも是非、本を手無限の旅に出て頂きたい。もしかしたら、それは貴方の人生を変える旅になるかも知れない。